「94年度の報告書」についてお知らせとお願い

利用幹事
下村　理、村田隆紀、石黒英治

利用幹事は９月２６日に共同チーム、財団と今年度以降の調査報告書についての話し合いを持ちました。昨年の場合は、初年度のこともあってこのような報告書作成の基本方針についての話し合いの場を持つことができませんでした。そのため、共同チーム側の意向を良く理解していなかった面もありましたので、今回は共通理解を深めるために、このような話し合いをいたしました。

その場で、今後の報告書の基本方針を確認して、次のような方針を立てました。この内容は、以前にお願いしたものとは異なる部分がありますので、御注意ください。

なお、各SGに対しては、原稿提出をお願いする手紙を年末ごろに個別に送ります。その際、原稿のフォーマットの例示もいたします。作業の省力化のためにも、例示されフォーマットに従って原稿作成にぜひとも御協力をお願い致します。

共同チームと利用幹事の打ち合わせの内容

（１）報告書の基本的考え

・その年のSGの活動に則したものであること。
・関連研究者、施設に広く配布されるものであり、他の施設や分野の研究者が読んで、ビームライン建設の状況が十分に理解できること。
・継続性があること。
・ESRF、APS、SPring-8の三極会談の申し合わせである「情報は基本的に英語で流通させる」に沿うこと。

（２）報告書の内容

・その年にビームラインの建設開始が認定されたSGについては、その詳細設計を含む内容説明。レベルとしては、他の施設や分野の研究者が見てそのグループが具体的に何をしようとしているか理解できることが必要。
ただし、あまり長いと読みづらいので、図などを中心として出来るだけ簡潔明瞭に記述すること。ここで使う図などは、グループとして他の説明会や紹介記事、論文などに使うものを利用することが想定され、報告書のためだけに作図することはないと考えられる。
・ビームライン申請を提出したグループについてはその概要を簡潔にまとめる。申請書はＡ４で１０－２０ページにわたっており、そのままでは読むのに負担がかかるので、圧縮する。
・提案趣意書を出したグループについてはその内容を出す。ただし、趣意書そのままではなく、必要な部分にとどめる。
・何もアクションをおこしていないSGについては、別途考慮する。

・懇談会に所属しているグループのみを対象とする。したがって、特定ビームライン、原研、理研ビームラインはこの報告書の範疇に入らないものとする。

（３）体裁
・言語は英文とする。
・フォーマットについては、ESRFのブルーブックなどを参考にする。
図面、活字の大きさに注意して、読みやすいように心がける。
・報告書は英文のみとし、前回（次世代研究会時代）に作った日本語の要旨はなしとする。
（必要とあれば、共同チームでまとめる。）

（４）提出期限
・原研、理研にそれぞれの分担分についての報告書を３月２５日までに提出する必要があることから、各SGが作成する報告書は２月２０日までに高輝度光科学研究センターに提出する。なお、財団は共同チームが必要とする部数（100部）を印刷・製本し、共同チームに提出するが、別途、財団が独自で配布する分（懇談会が配布する分を含む）については共同チームの了解を得て行う。

（５）その他
・この形式はこれからしばらく続ける。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

放射光関連会員の国内分布

庶務幹事　　坂井信彦

現在わが国には放射光関連のおおきな研究者団体が３つある。日本放射光学会、PF懇談会そしてSPring-8利用者懇談会（以下SPUSと略記）である。発足して２年目のSPUSの会員が全国にどのように分布して、それが他の団体の会員分布とどのような違いがあるかは興味深いところである。幸い他の２団体事務局のこころよい協力を得て[P.30 表１]の会員県別分布表ができた。

この表から放射光に関連する研究者の国内分布がいろいろ読み取れる。会員数にはかなり大きな地域差がある。各地の主要大学が存在する地域や放射光施設が存在する地域に会員数が集中している。SPUSの会員分布には特徴が見られ、ことに兵庫県（SPring-8所在地）と埼玉県（理研所在地）にPF懇談会より多くの会員がいる。PFに近い宮城県にSPUS会員が多いのは何を意味するのだろうか。PF懇談会に比較して関西・中国地方の会員数が増加している。PF懇談会では茨城県（PF所在地）にピークがある。細かに数値をながめるとこれ以外の現実が読み取れる。

SPring-8の完成時には現在とは異なった会員分布となる可能性がある。その頃改めて比較一覧を行ってみたいものである。